

# 体育授業における資質・能力に関する研究

## ～児童の運動習慣・経験に視点を当てて～

今井 海 ( 東京学芸大学 )

### 1. 目的

本研究は、体育授業において小学校高学年の児童が、自身の「思考力・判断力・表現力等」（汎用的スキル）と「学びに向かう力・人間性等」（態度・価値）に関する資質・能力をいかに自己認識しているかについて、運動経験及び運動習慣、体育・運動への志向を視点として明らかにすることを目的とした。

### 2. 研究方法

#### 1) 対象者及び調査方法

東京都K市立K小学校第5学年 55名を対象に資質・能力に対する自己評価について、質問紙調査（直接配布法）を実施した。

#### 2) 分析方法

因子ごとに下位尺度の合計得点の平均値を求め、児童の属性等を独立変数として  $t$  検定及び分散分析を行った。また、データ分析には SPSS25 統計パッケージを使用した。

### 3. 結果と考察

1) 対象児童のうち、過去や現在を通して「スポーツの習い事を経験したことがない」と回答した児童は6名で、全体の 87.2% はスポーツの習い事の経験があった。また種目数では、「2個以上」が 27名 (49.1%) であった。

2) 児童の習い事の経験と、習い事の経験種目数から、運動経験と体育授業における自己評価との関連性を考察したところ、習い事をするうえで児童と関わる「環境的」要因と、「スポーツの面白さ」要因の2つが大きく影響して

いることが推察された。

3) 児童の運動への志向と体育授業における自己評価の関連性については、児童家族の存在が大きく影響していた。また、種目特性による違いは見られなかったことから、児童が選んだスポーツにどのような姿勢で取り組んでいくのが重要であると考えられた。

4) 汎用的スキルより態度・価値の方が、児童の自己認識は高かった。高学年児童にとっては、態度・価値については自身をもって自己評価しやすいことが推察された。一方、汎用的スキルは認知スキルであるため、高く自己評価することに対して躊躇や謙遜をしているためではないかと考察された。また、児童にとって汎用的スキルの概念が難しく、自己評価しにくいことも要因ではないか。

5) 資質・能力に対する自己認識を高く捉える要因として、環境（外発的）、スポーツの面白さ（内発的）、スポーツに取り組む姿勢の3つが関連している可能性が示唆された。

### 4. 結論

本研究を通して、体育授業において資質・能力を高く自己認識するには、豊かな運動経験及び運動習慣、体育・運動への好意的な志向が影響することが明らかになった。

### 5. 主な参考文献

1) 鈴木他 (2018) 「OECD」との共同による次世代対応型指導モデルの研究開発」プロジェクト平成 28 年度研究報告書 東京学芸大学次世代教育研究推進機構